

桑野小学校 「学力向上実行プラン」

研究テーマ

- ①「ユニバーサルデザインの視点を活かした学習規律の定着と分かりやすい授業の構築」
- ②「各学年の発達段階に応じた主体的・対話的な言語活動の充実」

学力向上検討委員会構成

学力向上推進員	委員
宮本 裕美	校長 長瀬 雅博 教務主任 吉本 憲司 特別支援教育コーディネーター 吉本 憲司 森 郁子 宮本 敏美 久保 文香

校長
吉本 憲司 印

(1)基礎的・基本的な知識・技能の習得

児童生徒の状況	具体的目標(目指す子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ	与えられた学習課題にはまじめに取り組むことができ、漢字の読み書きや基本的な計算については、70～80%程度の定着が見られる。	①各学級の80%以上の児童が、単元テストにおいて、正答率を80%以上にする。 ②大事なことを的確に聞く、読む、考えたことや伝えたいことを的確に話す、書くことができる児童を各学級で90%以上にする。	毎時間めあてとまとめを板書し、1時間の見通しがもてる授業を継続して行う。	授業の流れを明確化するために、めあて(課題)や学習課程を提示し課題解決的な学習に取り組む授業を行うことができた。また、朝の活動やつぼみっ子タイムを生かして基礎的な知識・技能を身に付ける活動が進み、視写学習も定着してきた。	自主的に課題に取り組む児童が増え、めあてに対して意識してまとめや振り返りを行うことができるようになってきている。しかし、単元テストの正答率を学級の80%以上にするのは難しく、達成している児童とそうでない児童とで二極化している。
課題	学習の積み重ねが難しく、知識・技能の定着が困難な児童がいる。語彙数が少なく読解能力や文章表現力が弱い。	①ユニバーサルデザインの視点を活かした指示・発問の出し方や活動方法、板書の工夫を図る。 ②子どもの実態に即した課題解決的な学習を取り入れ、目的や意図に応じて必要な情報をとらえながら読んだり書いたりする活動を充実させる。	①目標と活動、発問、子どもの言語活動に整合性があるかに焦点を絞り、研修をすすめる、改善点を明確にする。 ②各学年の発達段階に応じた教材を活用して、視写の学習を計画的に実施する。	評価	次年度における改善事項
				B	・基礎・基本を学ぶ学習と課題解決的な学習との計画的な単元構想が必要だと考える。 ・各学年で身に付けておく知識・技能が習得できるよう反復学習やミニテストを繰り返し行う時間を確保する。 ・授業中で文章を読んだ中から必要な情報を正確に捉えられるよう読解の活動や書く活動を増やす。

(2)知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況	具体的目標(目指す子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ	各教科、学級活動、総合的な学習の時間において、課題を明確にし、目的に応じて必要な情報を収集・整理・分析し、根拠や理由を明らかにしながら、自分の考えを豊かに表現することができる。	「自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることが得意」と答える児童の割合を80%以上にする。	課題解決的な学習や探究学習の中で発達段階に応じて、自分の考えを伝えるための手立てや話型を示す。	特別活動、生活科、総合的な学習の時間、自立活動、生活単元学習を中心にペア学習や小集団学習の場を設定し、文章に書いたことや自分の考えを話せるような力をつけた。	自分の考えが伝えられるようになった児童が増え、友達の考えを比較・検討しながら聞くことができる児童が増えてきた。しかし、根拠となる理由を述べたり自分の考えを深めたりすることは十分とは言えない。
課題	自分の考えの基となる情報を収集したり、整理・分析したりする力が弱い。自分の考えの根拠や理由を明確にして、筋道を立てて文章で表現することに課題がある。	育てたい力を明確にして、生活科・総合的な学習・生活単元学習の体験・交流学習を中心に各教科・領域の教育内容の関連を明確にし、各教科等の知識・技能が積極的に活用されるカリキュラムデザインを作成し実践する。		評価	次年度における改善事項
				B	・ペア学習、小集団学習での話し合い活動で、自分の考えをしっかりと表現できる場を設定する。 ・自分の考えやその根拠を筋道を立てて表現するための指導と文章表現の機会を増やしていく。 ・発達段階に応じ、「話し方の話型」を生かして話し合いを進めていく。 ・視写学習は継続して取り組んでも良いと考える。

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況	具体的目標(目指す子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ	①学習規律を確立し、スムーズに授業が始められる。 ②課題を自分事として捉え、見通しもって粘り強く取り組むことができる。 ③学校や家庭で、進んで読書をする習慣が身に付いている。	①学習規律が身についているという児童の割合を80%以上にする。 ②課題に対して自分の意見を言える。 ③図書貸出数が月5冊以上の児童が全体の80%以上にする。	授業の準備ができていないか、全校で一斉に記録し、学習規律の定着を図る。	授業準備ができていないかを記録することで意識的に毎時間準備ができるようになってきた。また、課題に対して自力解決の場を設定し、児童は自分事として捉え、積極的に取り組んだ。	授業準備ができる児童は90%以上に達し、授業のスタートがスムーズに行えるようになったため、授業に向かう姿勢や集中力も高まってきている。また、児童が自ら学級の課題を見つけ、解決しようとする意欲が高まり話し合い活動を進められるようになってきた。
課題	学習規律が十分に身につけていない児童がいる。自ら課題を見つけ主体的に学習に取り組むことが苦手である。読書の習慣が少しずつ身に付いてきているが、まだ十分とは言えない。	①学校全体で共通したものを教職員で設定し、実践する。 ②特別活動年間指導計画を元に、話し合いの活動を推進する。 ③週末読書を推進する。		評価	次年度における改善事項
				B	・学習の課題設定とまとめが児童自らが出来る授業に少しずつ取り組む。 ・話し合い活動を通して、自信や達成感をもたせられるようにする。 ・学習規律では新たなものに取り組むことができるようにする。 ・週末読書は継続して行う。

平成31年度 学力向上ロードマップ

